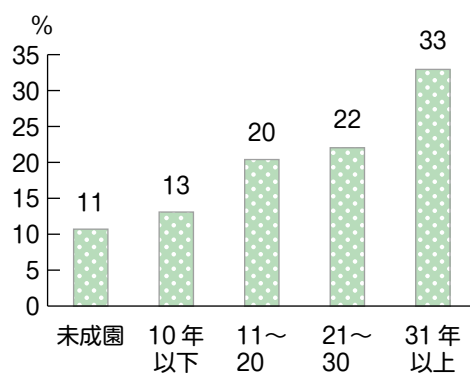


### (特徴ある品種による生産構造の強化)

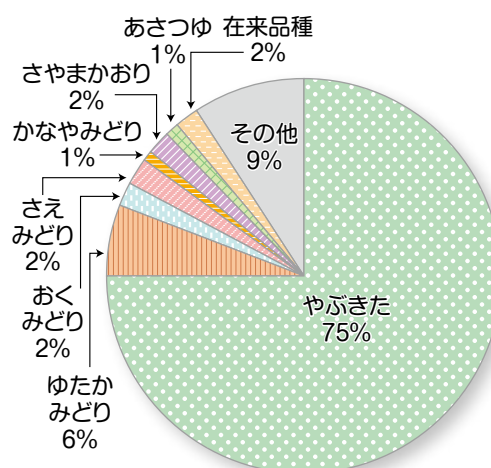
茶園面積を樹齢別にみると、茶園の33%が樹齢30年以上の老園となっており、根系の老化等による収量減少やうまみ成分(アミノ酸)の含量低下が懸念されています(図2-4-14)。また、茶園面積を品種別にみると、昭和30年代以降に品評会で高い評価を得たことを背景として、茶園面積の75%を「やぶきた」が占めていますが、摘採作業の集中や摘み遅れによる品質低下、お茶の風味の画一化等を招いているのではないかとの指摘もあります(図2-4-15)。

図2-4-14 茶園面積の樹齢別割合  
(平成23(2011)年度)



資料：農林水産省調べ

図2-4-15 茶園面積の品種別割合  
(平成24(2012)年度)



資料：農林水産省調べ

このような中、風味や耐病性に優れ、「やぶきた」とは収穫適期の異なる「なんめい」や「さえあかり」等の品種が開発されています。また、メチル化カテキン<sup>1</sup>含量が高い「べにふうき」やアントシアニン<sup>2</sup>含量が高い「サンルージュ」のような機能性成分による需要拡大が期待される品種も開発されています。

今後、生産性が低下した老園において、このような特徴ある品種への改植等を進めることにより、作期分散による作業の効率化や品質向上を図るとともに、新たな需要創出に取り組んでいくことが重要です。

## (8) 甘味資源作物

### (てんさい、さとうきびは近年不作傾向)

てんさいの作付面積は、労働力不足等を背景として、近年減少傾向で推移しており、平成25(2013)年産は5万8千haとなっています<sup>3</sup>。また、単収の推移をみると、平成22(2010)年産において大きく低下していますが、平成23(2011)年産以降は回復がみられます(図2-4-16)。しかしながら、てんさいの糖度は、平成22(2010)年産以降、収穫前の夏から秋における高温多湿の影響を受け低い水準となっています。

一方、さとうきびの収穫面積は、近年おおむね横ばいで推移しており、平成24(2012)

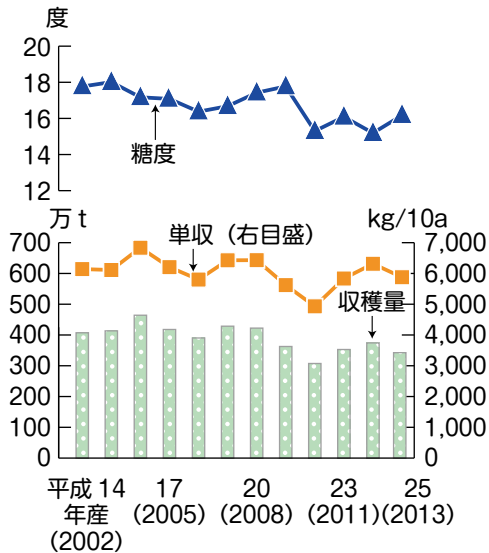
1 茶葉中に含有されるポリフェノールの一種で、抗アレルギー作用を有している。

2 アントシアニンは、赤、赤紫、紫、青を呈する植物色素。アントシアニンの種類により発現される機能性及び活性の強弱は異なるが、抗酸化性は共通して発現される。

3 農林水産省「作物統計」

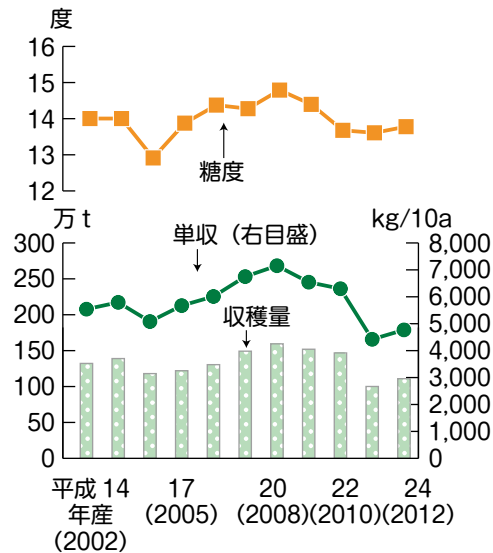
年産は2万3千haとなっています<sup>1</sup>。また、単収の推移をみると、平成23(2011)年産及び平成24(2012)年産は台風の襲来や病害虫の大発生等の影響を受け、平成22(2010)年以前の水準に比べて大きく低下しています。さとうきびは増殖率が低いため、一旦不作になるとその影響は3年から4年に及ぶと言われており、不作からの脱却、着実な生産回復が課題となっています(図2-4-17)。

図2-4-16 てんさいの生産量、単収、糖度の推移



資料：農林水産省「作物統計」、北海道調べ

図2-4-17 さとうきびの生産量、単収、糖度の推移



資料：農林水産省「作物統計」、鹿児島県・沖縄県「さとうきび及び甘しょ糖生産実績」を基に農林水産省で作成

### (てんさい、さとうきびは地域経済にとって重要な作物)

てんさいは、北海道の畑作地帯において収量低下や病害虫の発生を防ぐための三輪作(小麦、てんさい、ばれいしょ)又は豆類を加えた四輪作の一部を構成しており、ばれいしょとともに農業生産を維持する上で重要な作物となっています。また、北海道の各地に所在する製糖工場、でん粉工場は、地域の雇用を担っていることに加え、畑から作物を運ぶ運送業や製品を保管する倉庫等の関連産業も地域経済を支えています(図2-4-18)。

一方、さとうきびは、台風の常襲地域である沖縄県及び鹿児島県南西諸島において代替困難な基幹作物として広く生産されています。また、さとうきびは収穫後早急に加工する必要があることから島しょごとに分みつ糖<sup>2</sup>工場や含みつ糖<sup>3</sup>工場が所在しており、これらの工場は特に離島における雇用機会の維持・確保に重要な役割を果たしています(図2-4-19)。

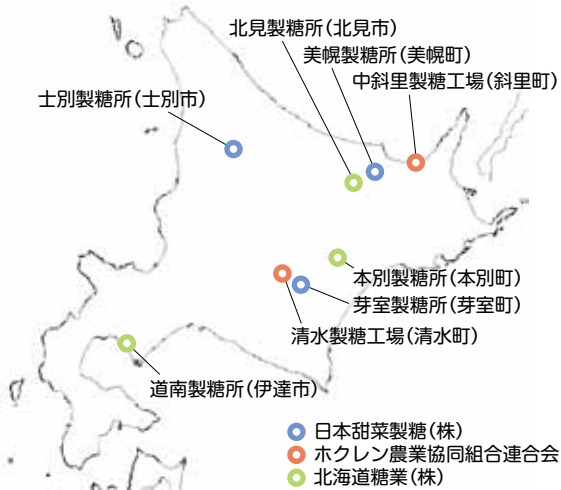
てんさいやさとうきびの生産量が減少すると、製糖工場等の地域の関連産業に影響が及ぶことが懸念されるため、甘味資源作物の安定生産を図っていくことは重要な課題です。

1 農林水産省「作物統計」

2 分みつ糖は、さとうきびの絞り汁等に含まれる糖分を結晶化し、糖蜜を分離したもの。一般的に使われる白砂糖等。

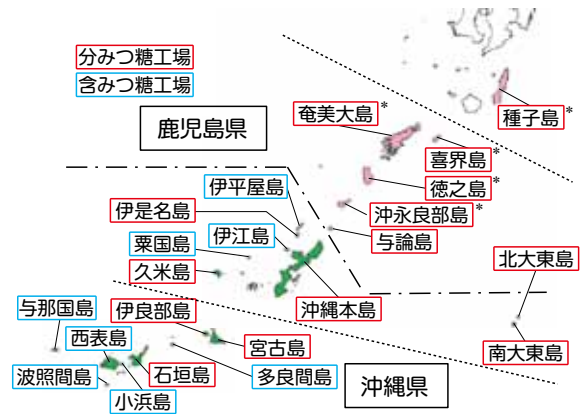
3 含みつ糖は、さとうきびの絞り汁をそのまま煮詰めたもの。黒糖や和三盆等。

図2-4-18 北海道における製糖工場の分布



資料：農林水産省作成

図2-4-19 鹿児島県、沖縄県における甘しゅ糖工場(分みつ糖、含みつ糖)が所在する島



資料：農林水産省作成

注：\*種子島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島には含みつ糖の小型工場も所在。

このような中、生産の安定化に向けて、てんさいでは、褐斑病<sup>かつばんびょう</sup>や黒根病<sup>くろねびょう</sup>等に高い耐病性を備え、糖の含有量が多い品種の育成が進められており、これらの品種の普及に加えて、労働力不足に対応した直播栽培<sup>ちよくは</sup>の生産安定化技術の開発・普及等が期待されています。

一方、さとうきびでは、奄美群島向けの早期高糖・多収品種「農林30号」や宮古島向けの太茎・黒穂病抵抗性品種「農林31号」等、島しょごとの気候風土を踏まえた品種が開発されているほか、交信かく乱用フェロモン剤による害虫防除等の技術の活用が進められています。

## (9) いも類

### (ばれいしょの生産量は増加、かんしょは減少)

ばれいしょの作付面積は、生産に長い労働時間を要するため他作物への転換や、生産者の高齢化に伴う作付中止等により減少傾向にありましたが、平成24(2012)年産は、8万1千haで前年産から横ばいとなっています<sup>1</sup>。生産量については、近年、春先の低温・多雨による初期生育の遅れや夏季の高温による塊茎肥大<sup>かいけい</sup>の抑制等がみられましたが、平成24(2012)年産は、前年産に比べ5%(11万t)増加し250万tとなりました。

かんしょの作付面積は、生産者の高齢化に伴う作付中止等から、微減傾向にあり、平成24(2012)年産は、3万9千haとなっています<sup>2</sup>。平成24(2012)年産における生産量は、主産地の鹿児島県における挿苗期<sup>そうびょう</sup>の低温と、それに続く日照不足等の影響により生育が抑制されたため、前年産に比べ1%(1万t)減少し88万tとなりました。

### (ばれいしょの病害虫抵抗性品種の導入促進)

ばれいしょについては、一度発生すると防除が困難で、収量を半減させるジャガイモシストセンチュウ等の難防除病害虫の発生拡大への対応が課題となっています。

主産地の北海道におけるジャガイモシストセンチュウの発生は、平成24(2012)年度までに、道内の49市町村、総面積で約1万haに拡大しています(図2-4-20)。

1 農林水産省「野菜生産出荷統計」

2 農林水産省「作物統計」